

家族農業労働の編成とジェンダー

—農業機械と男性性の関係に注目して—

京都大学大学院 芦田裕介

1. 目的

本報告の目的は、日本における家族農業労働の編成原理を、男性性に注目して考察することである。1992年の「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン」策定以降、諸政策の下で農村における「男女共同参画」の実現に向けて様々な方策がとられてきた。しかし、法律上の平等にもかかわらず、日常のあらゆる場面において、ジェンダーの非対称は厳然として存在する（原・大内編 2012）。本報告では、農業労働における性別分業の問題について取り上げる。

近年の農業労働に関する研究は、ジェンダーの視点から、当事者の労働の意味づけに注目し、農家における労働の編成原理を明らかにした（渡辺 2009）。しかし、日本農業においてマイノリティである専業農家を対象としているため、その知見の普遍性には疑問がある。そこで、本報告では、日本農業においてマジョリティである兼業農家における農業労働の編成原理を明らかにしたい。また、農村社会においては男性を中心とする既存の秩序が非常に根強く、この点は先行研究のように農家女性に注目するだけでは見えてこない。すでに欧米の農村社会学では、特定の農業技術が男性のためにデザインされ、それらが男性的な言葉や表象と結びつくことで、農場が男性性優位の空間として形成されていることが明らかになっている。本報告ではこうした視角を援用しつつ、日本農業の中心である稲作に不可欠な農業機械という技術に着目し、農業機械と男性性の関係が、農業労働の編成とどのように連関するのかを考察したい。

2. 方法

戦前からの農業機械化の先進地である岡山県岡山市南区興除地域において、2011年8月～2012年2月にかけて、戦後の農業労働について、文書資料の収集、地域の農家と農協職員に対する聞き取り調査をおこなった。これらのデータに加え、農業機械メーカーの資料も分析に用いた。

3. 結果

第1に、兼業農家でも専業農家と類似した農業労働における編成原理を確認できた。ただし、兼業農家の女性は、専業農家の女性と異なり、農業にかかわらないという選択肢を取りやすい。第2に、日本においても農業機械は男性性の象徴という側面があり、農業機械の操作は男性性と強く結びついている。ここでの男性性のあり方は、日本の圃場条件や周囲の景観、あるいは機械を開発・普及する農業機械メーカーの体制と密接に結びついて構築されており、容易に変化しにくい。これらのことは、農家女性を農業機械、さらには農業から遠ざける要因となっている。

4. 結論

農業機械化によって、農家女性は農業労働において周辺化される。この状況は、女性が農業に参入しにくいというだけでなく、男性が農業を担う存在として規定されることを意味する。農業が周辺化された産業となっている現状で、男性が望むかどうかに関係なく、農業が男性の領域となっていることについて、女性のみならず男性も含めた問題として議論する必要がある。

文献

原珠里・大内雅利編, 2012, 『農村社会を組みかえる—ジェンダー関係の変革に向けて』農山漁村文化協会。
渡辺めぐみ, 2009, 『農業労働とジェンダー』有信堂高文社。